

# 国語科カリキュラムにおける メディアの役割に関する研究ノート

—Connolly, S. (2021) *The Changing Role of Media in the English Curriculum* を読む—

砂 川 誠 司

## 1. はじめに

本研究ノートは、国語科におけるメディアの位置づけや役割について、Steve Connolly (2021) *The Changing Role of Media in the English Curriculum: Returning to Nowhere* から示唆を得ようとするものである。日本の国語科におけるメディア教育は、イギリスをはじめオーストラリアやカナダなどの諸外国のカリキュラムに学びながら展開してきた側面がある。松山雅子 (1995) や奥泉 (岩本) 香・中村敦雄・中村純子 (2003)、近藤聡 (2009) などの研究がそれを支えてきた。イギリスのものについてはカリキュラムだけでなく教材の検討も充実している (羽田潤, 2020) が、現状では学習指導要領や教科書にメディアは明確に位置づけられてはおらず、制度的な側面とどのように折り合いをつけて国語科のメディア教育を実施していくかという点は課題のひとつである。

また、新型コロナウイルス感染症以後、国語科においても急速に ICT 活用という点からメディアの利用が広まりつつあるが、それらは目下のところ従来の指導をより効率的にする手段として、あるいは対面での学習機会の代替手段として、さらにはデジタル社会において標準化されるべき学習ツールとして検討されており、これまでの国語科の研究で検討されてきたメディアの批判的理解や制作的活動などは検討の方向性がやや異なるものであると考えられる。もちろん利用経験が増えるほど、批判的な見方も生まれやすくなると思われる。が、単に経験を増やすだけでは批判的な理解がどう育まれるべきなのかを明らかにすることはできない。改めて、国語科においてメディアを利用するという点について、国語科教育のカリキュラム全体としてどう捉えていく必要があるのかということを確認していかなければならないと考える。

まとめると、国語科におけるメディア教育は、国語科教育のカリキュラム全体としてどう捉えられる必要があるのかという基礎的な検討と、現実の制度的な側面とどのように折り合いをつけて実施していくことであるのかという応用的な検討の二つを同時に考えていくことが必要である。本研究ノートにおいては、長らくメディアを英語 (国語) 科カリキュラム (以下、English については特に文脈に支障がない限り「国語」と表記する。) に位置づけてきたイギリスに注目する。イギリスにおいて、制度的な側面と、

実践的な側面がどのように交渉してきたのかを知ることは、日本の国語科でのこれからのメディア教育においても参考になる点が少なからずあるのではないかと予測するためである。以下、Connolly, S. (2021) の記述をたよりに、それらをまとめていきたい。当然のことながらその記述は批判的に検討される必要もあるが、残念ながら本研究ノート執筆時においてそれだけの余裕がない。稿を改めて検討したい。

## 2. *The Changing Role of Media in the English Curriculum* の概要

筆者である Steve Connolly は、イギリスの中等教育において国語とメディア研究について教え、なかでも動画制作やメディアのカリキュラムについて論じてきた人物である (Connolly, 2013; 2020 など)。 *The Changing Role of Media in the English Curriculum: Returning to Nowhere* (『国語科カリキュラムにおけるメディアの役割変化—どこにも存在しない場所への回帰』) の執筆時はベッドフォードシャー大学で教師教育学のプログラムを教えている。また、メディア教育協会 (The Media Education Association) の現会長を務めている人物である。

*The Changing Role of Media in the English Curriculum* (以下、本書と表記) が書かれた直接的な動機は、2014年版のナショナル・カリキュラムから「メディア・テキストへの言及が完全に削除された (p.2)」ことによる。それは1988年以後のナショナル・カリキュラムとの「断絶 (disconnect)」だと Connolly はいう。この断絶がどのようにして生まれたのかということを経史的にたどり、そこから今後の展望をひらくことが本書の主な目的である。そのために、英国国立公文書館に保管されるナショナル・カリキュラムに関わる膨大な資料を掘り起こし、どのような立場の人がどのような発言を行ってきたか、それらが政策決定にどのように影響してきたかが考察される。この考察は、いくつもの資料における発言を言説 (discourse) と捉えて分析する批判的言説分析である。それにより、Connolly が主張するのは、現在のカリキュラムが「どこにも存在しない場所への回帰 (Returning to Nowhere)」という本書のサブタイトルにも書かれる内容である。

本書の目次は以下のとおり。

序章	どこにも存在しない場所に戻りつつ
第1章	いまここは、どこも知れぬ場所：イギリスの国語科カリキュラム 2010-2021
第2章	「私たちはどうやってここまでたどり着いたのか」：1988年以前のメディア、映画、国語科
第3章	ナショナル・カリキュラム国語科におけるメディア：1988～1990年
第4章	役割の発展：1990～2010年の国語科のメディア・テキスト
第5章	他国のカリキュラムにおけるメディア・テキスト
第6章	イデオロギー、社会学、心理学：過去の腹話術
第7章	今後の展望：テキスト、リテラシー、テクノロジー

### 3. どこにも存在しない場所への回帰とは

イギリスでは2010年に政権が交代し、保守党と自由民主党の連立政権が誕生した。教育省（DFE）はその年の教育白書として『教えることの重要性（*The Importance of Teaching*）』を出す<sup>1</sup>が、Connollyによればその内容は「「伝統的な教科の訓練」、「ブレザーとネクタイの制服、監督生制度・寄宿の制度」、「厳格さと高い水準」に戻る必要性が語られている（p.8）」ものである。白書ではイギリスのPISA調査の成績が落ちた<sup>1</sup>ことを背景に、他国の成功例<sup>2</sup>に学び、教師養成の質を高めるべきであることが述べられている（DEF, 2010）。具体的には教師や学校に多くの権限を委譲し自由を確保すること、成果を明確にする指標を強化すること、貧富の差に対応していくことなどが示されたものであった。こうした方針のなかで、教科のカリキュラムについては「教育を受けた社会人として生徒たちが身につけるべき必須の知識と理解を説明する、教科内容に重点が置かれるようになる（DEF, 2010; p.42）」と宣言している。

その後、各種団体との意見交換が行われ<sup>3</sup>、2014年のナショナル・カリキュラムが具現化される。その過程において、NATE（National Association for the Teaching of English）やEMC（English and Media Center）はメディアへの言及がないことについて懸念を表明していたが、それらは反映されずカリキュラムができあがることになる<sup>4</sup>。Connollyはカリキュラムの三カ所<sup>5</sup>にのみ表現された「文化」という言葉に着目し、その言葉の用いられ方に対して次のように述べる。

このカリキュラムは文化を非常に狭い見方で捉えている。ポピュラーメディアやポピュラー小説のようなものが若者の文学や言語に対する考え方を育む上で果たすべき役割を考慮することはない。見方の広さの欠如は、事実上、意図的な意思表示であり、それは学校内での若者の文学・言語文化の経験を、あらかじめ承認された文化の定義内に限定するという意図である。（p.7）

Connollyはまた、カリキュラムにおける具体的な指導内容についての文言から、「新しい国語カリキュラムのためのいくつかの非常に明確な基礎、すなわち文学の継承（literary heritage）と厳格さ（rigour）を同一視することが確立している（p.11）」と述べる。それは、例えばKey Stage 4（14～16歳）では「代表的なロマン派の詩を含む、1789年以降の詩」が教えられることになっていることなどである。Key Stage 4はGCSE試験との関連が強く、カリキュラムに表現された「1789年」をそれぞれ厳格に記憶することが求められるようになるというわけである。が、そのような厳格さでもって国語を教えようとしてきたことがそれまでにあったわけではなかった。これが、戻るべき場所はどこにも存在していないとConnollyが主張する理由である。むしろ、彼に言わせるならば「（動画テキスト、ニュース、ウェブメディア、音声、広告などの）メディア分析的な活動は、前世紀のほぼすべての時期に国語の教室で行われていた（p.12）」のである。ただし、批判的で創造的なメディアの授業がカリキュラムに組み込まれてき

たというわけでもない。その意味ではConnollyのいう「どこにも存在しない場所(nowhere)」はメディア教育に携わる者が見出す理想的な場所だとも捉えることができ、新たに作っていかねばならない場所というニュアンスも含まれているといえるかもしれない。

いずれにしても、Connollyの見方にしたがえば、新しいカリキュラムにおいては極めて抜本的な改革が行われたとみるほうが自然である。これまでのカリキュラムと「断絶」しているという見方も必然的に導かれるものであろう。しかし、なぜそこまでしてメディアの学習を国語から切り離すべきだと考えられたのか。当然のことながら、新しいカリキュラムは保守的な政治活動の結果ではある。しかし、それ以上に、国語とメディアとのより複雑な関係性を捉える必要があるだろう。Connollyも述べているが、「より伝統的なカリキュラムへの回帰を歓迎 (p.11)」する学校もある。理論的・実践的な観点からも、国語とメディアの関係を慎重に捉える必要がある。

Connollyは続けてナショナル・カリキュラムが作られる1988年以前の状況にまで遡り、国語科におけるメディアの役割についてどのような言説が歴史的に現れてきたのかを分析する。次に、それらを見ていきたい。

#### 4. 中立的な存在としてのナショナル・カリキュラム

Connollyは国語科でメディア・テキストを用いた学習活動の最も古い記録として1940年に雑誌*Sight and Sound*<sup>6</sup>に掲載された記事を挙げ、実践を行った教師に「国語の教室がある種の批判性を励ますための自然な環境であるという認識がある (p.23)」とし、現代の国語科でメディアを扱う教師と同等の認識があったことから話を始める。同時期にはイギリスでのメディア教育の源流として取り上げられるF. R. リーヴィスの活動があるが、「直接的 (原文ではイタリックで太字)」な影響はおそらくないとConnollyはいう。ただし、彼は国語教師たちにリーヴィス由来の「ポピュラーカルチャーの批評性を発展させたいという意識」があったことは重要だとしている。その後、70年代には教室でメディア・テキストをどのように扱うことができるのかといった議論が頻繁に行われるようになり、そこには学習者たち自身の嗜好や反応をメディアがどのように形成しているのかといったことに言及するものが見られるようになる。このような議論を取り上げながらConnollyが示そうとするのは、メディアの学習における学習者の経験的な知識や理解の重要性<sup>7</sup>であり、それが国語科の活動としてよく議論されてきたという歴史である。

本研究ノートにおいて議論の詳細に立ち入ることはできないが、いくつかの議論を検討したうえでConnollyは、1980年代に、「メディア・テキストは英語のカリキュラムの中でその地位を獲得したという実感があった (p.34)」こと、そして「1980年代の終わりには、教師たちや教師教育者たちにとって、さらには数は少ないが政策立案者たちにとって、メディア教育が「重要な課題 (on the agenda)」であるという実感 (p.36)」

があったとまとめる。これに続けて、

イギリス初のナショナル・カリキュラムを開発するにあたって、メディア教育の切迫性や重要性への実感が、国語や他の教科におけるメディア教育の役割についての重要な諸議論を導いたのである。その議論は、当時の教育的・政治的な関心事について多くのことを明らかにしている。その中にこそ、(現在では、生徒や教師からほとんど失われているのではないかと私は主張したい)メディア教育の意義が見出されるのである。(p.36)

と、ナショナル・カリキュラム制定前夜における議論の歴史に、現代につながる多くの論点が表示されていることを Connolly は指摘する。Connolly が歴史を紐解くのはこのことを示すためであるが、括弧内に表現されていることも彼にとっては重要であろう。すなわちそれは現代に対するいら立ちである。これには Connolly の別の見解も影響している。本書のなかでは第4章にあたる1990年以降のナショナル・カリキュラムについて書かれている部分ではあるが、彼は次のように現代を捉えている。

イギリスで過去10年間に策定されたカリキュラム政策の一部は、意図的な「忘却」行為を行うことにあるようだ。ある意味、国語とはなにか、国語とはどのように作用するのかということについての力強く思慮深い言明を、教師やその他の教育者に忘れさせようとする試みが行われているのである。(中略)「国語調査委員会」は、国語とメディア教育の関係について力強く語り、その言葉は最終的に一定の効果をもたらした。「境界」という言葉は関心を引くもので、学校の教科をめぐって話することを再びもたらした。しかし、前述した国語とメディアの関係のいくつかの前向きな進展があったことより前にはさかのぼらないのである (p.67)。

現代に対するこのような認識があるからこそ、Connolly は歴史的な議論を再評価しようとするのである。

ナショナル・カリキュラムの作成に直接関わる歴史的な議論としては、カリキュラム策定のために設置された国語ワーキンググループ (English Working Group/EMG) に提出された資料を Connolly は多く取り上げる。これはカリキュラム作成に関する歴史的な資料の発掘という側面と同時に、国語ワーキンググループの最終報告書 (通称コックス・レポート) と1990年の完成版ナショナル・カリキュラムとのあいだのズレを確かめるためでもある。扱われる資料は、Len Masterman や David Buckingham などの専門家のもの、BFI や初等メディア教育のための国家作業部会 (the National Working Party for Primary Media Education)、NATE のものなど多岐にわたる。

これらの議論のなかにも現代のメディア教育につながる論点を Connolly は示していくが、完成版のナショナル・カリキュラムに向けての議論として、Connolly は Brian Cox の発言をたびたび引用する。そもそもナショナル・カリキュラムの制定は、「教育黒書運動」と呼ばれる進歩主義教育批判の運動を背景にもつものである<sup>8</sup>。その『教育黒書』の著者のひとりが Brian Cox であり、コックス・レポートと呼ばれる草案の作成

責任者である。つまり、伝統主義者である Cox にカリキュラムの作成が託されたのであるが、国語のメディア教育に関するものについていえば、コックス・レポートはむしろ革新的な印象がある。当時の反応について Connolly は「学校の人々にとっては、完成した報告書においてはメディア教育の意義が強調されているように感じられた (p.54)」と述べている。特に「実践と批判の関係が大切だと捉えられている (p.54)」点は、制作的活動を中心とするメディア教育の基盤が示されているようでもあり、国語ワーキンググループに提出されたさまざまな意見が十分に反映された結果であると Connolly はみている。このような記述からもわかるが、Connolly の記述は、歴史記述としてみれば当然の方法論ではあるが、教育におけるイデオロギー的な対立の構図で歴史を捉えようとするものではない。実証主義的ともいえるかもしれないが、より俯瞰的に歴史を記述しようとするものである。また、それはイデオロギー的な対立のバランスに配慮しているというわけでもないようにみえる。Cox の仕事はナショナル・カリキュラムの成立に欠かせないものであり、必然的に取り上げる発言も多くなっているものと考えられる。それだけでなく、Connolly の記述からは、むしろある程度の評価が与えられているようにさえ見える<sup>9</sup>。ただし、残念ながら完成版ナショナル・カリキュラムにおいて、メディア教育は活動として自立させられなかった。これについて Connolly は、コックス・レポートから完成版への過程で政府による意図的な介入があったことを示唆している。

結果的に、完成版のカリキュラムは、部分的にメディア教育を組み込んだものとして成立することになる。それは「メディアに関心のある多くの教師にとってよいスタートとなったが、批判的なメディア分析や創造的なメディア制作という点では、必ずしも期待したほどではなかった (p.59)」とまとめられる。

以後のカリキュラム改訂における様々な議論についても Connolly は取り上げていくが、ここで確認しておくべきは、本書の副題でもある「どこにもない場所への回帰」についてである。第6章で Connolly は、Cox をはじめとする議論を再び取り上げつつ、現代の議論との接続を試みている。その結果、現代の「伝統への回帰は、伝統への回帰ではなく、1970年代から続く教育界における特定の立場の維持であった (p.97)」ということが明確にされる。むしろ、最初のカリキュラムから存在していたのは中立性だということである。Connolly が引き合いに出す以下の二つの資料（ともに p.98）がそのことを示唆している。孫引きのかたちになるが引用する。

国語のナショナル・カリキュラムは、現在の状況下では、おそらく維持可能な限り中立的な位置を占めているだろう。この記事はカリキュラムが左派からの攻撃を受けていることを示している。また、最近では特にリテラシーや読書の議論に関連して、右派からも強い攻撃を受けている。さらに、ナショナル・カリキュラムが法定化されたいま、これまで政治的な争点となってきたカリキュラムそのものが世間の注目を浴びるようになることも、おそらく受け入れなければならないだろう。

(GR Frater メモ、1991年6月21日、英国国立公文書館 183/243)

私たちの主な関心は、イギリスの教育に関する公的な議論の対立的な性質にある。それは、「伝統的なもの対進歩的なもの」、「シェークスピア対ソープオペラ」という単純な二項対立によって特徴づけられている。しかし、私たちが聞いた証言者が表明した幅広い価値観にもかかわらず、私たちは、凝り固まった対立や和解できない二極化の証拠を見つけることはできなかった。実際には、大部分の合意があった。教育が派閥に支配されているというのは、風刺画のようなものだとは私たちは考えている。(国語調査委員会報告書、1994、P.12)

極めて平凡でありまえの結論のようでもあるが、カリキュラムがイデオロギー的な中立性にその特質を持っていること、それが多くの立場の人々との対話的な状況のなかから生まれてきているということが、Connolly の現状認識、ひいてはイギリスのメディア教育の現状からみて重要なのである。

そのようなカリキュラムにおいて、「メディアの役割」とはどのようなものであろうか。ここまでの記述からは、それはすでに歴史的な議論のなかに描かれてきたということなる。それは固定的な「知識」を教えることではなく、子どもの「知識」を扱うということである。学習者の経験的な知識や理解からはじめ、実践的な活動を通して批判的で創造的な知を育むということである。Connolly はそうした方向性での展望を「テキスト」、「リテラシー」、「テクノロジー」の3点からまとめている。いずれも固定化された見方から捉える方向ではなく、動的なものとして継続的に関わることの必要性が示される。固定的な見方は規範的なものと結びつきやすく、記憶を中心とする学習に取り込まれやすいからである。子どもの「知識」を扱うということは、むしろ変化するテキストやリテラシーに対応していくことである。テクノロジーも、子どもたちがアクセスできる世界をコントロールするものであり、単なる道具としてではなく変化するその社会的機能に切り込んでいく必要がある。

こうしたメディアの役割は、ナショナル・カリキュラムのなかでは絶えず反対派の意見との交渉のなかで、折衷的なものへと落とし込まれてきた。これまでの歴史的な議論からすれば、以上のようなメディアの役割は既存の国語科カリキュラムに対する改良主義的な見方に変えられるということにすぎないかもしれない。しかし、歴史的な議論が示唆するのは、より対立的な構図のなかにメディアを位置づけていくことの必要性ではなく、より積極的な対話のもとに位置づけを築き上げていく必要性である。これまでのようにより多くの立場からの理性的な対話が行われることが期待される。

## 5. おわりに

Connolly (2021) の記述からは、これまで日本で紹介されてきたイギリスの国語科におけるメディア教育とは異なる事実を目の当たりにすることもあったが、イギリスにおいてメディア教育が実践的な広がりや理論的な検討が立場を超えて理解されていく様子

は日本であまりみられる光景ではないようにも思う。多くの人が丁寧に議論を重ねながらカリキュラムが構想されていく過程は、メディア教育でなくても求められるべきものである。

制度的な側面と、実践的な側面がどのように交渉してきたのかということについては、かなり細かな議論が紹介されていたが、そのことにあまり触れられなかったので、最後にひとつだけ、紹介されている国語ワーキンググループの議事録のひとつからの引用を（これまた孫引きのかたちになるが）記しておきたい。ワーキンググループは1988年6月23日の会議において、国語科のカリキュラム策定にあたって優先すべき事項として、「メディアの活動を制度化」を挙げた。その理由は「現在、この活動は愛好家 (enthusiast) に依存している傾向がある (p.42)」からである。つまり国語科にメディアが制度的に組み込まれていないことによって、一部の意識的な教師（しかも愛好家）によってのみ実践が行われていることを問題視し、より一般化する必要を示したのである。Connollyの記述からも、あるいはイギリスのメディア教育実践について知っていれば、単なる愛好家の実践というよりはもっと広く行われていたものと思われるが、政策決定の場ではそのような見え方となっている点には、日本での状況と比べた場合、考えさせられるものがある。日本では現在、国語科でのメディア教育が広く行われているという状況ではない。子どもの知識からはじめるというシンプルな原理から複雑な授業実践まで、より多くの人が関わる対話的な場を形成していくことなしに、国語科のカリキュラムにメディアが居場所を確保することは難しいようにも思う。そのためには、イギリスの教師たちがナショナル・カリキュラムに表現されたことを拡張して捉え、メディア教育を継続させてきた歴史<sup>10</sup>にもより学ぶところがあるだろう。そのような実態の調査もまた、国語科カリキュラムにおけるメディアの役割を捉えていくうえでは重要なものになると考える。

## 6. 参考文献

- 奥泉香 (2018) 『国語科教育に求められるヴィジュアル・リテラシーの探究』、ひつじ書房
- 奥泉 (岩本) 香・中村敦雄・中村純子 (2003) 「メディア教育における国語科を中心とした関連カリキュラムの意義—西オーストラリア (WA) 州における教育的インフラストラクチャー」 (『国語科教育第 54 集』全国大学国語教育学会、pp.43-50.)
- 国立教育政策研究所 (2013) 『教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書 4 諸外国における教育課程の基準—近年の動向を踏まえて—』
- 近藤聡 (2009) 「カナダの国語科におけるメディアリテラシー教育の発祥 (1950～80年代)—カナダ社会の「アイデンティティー形成思想」とメディア概念の変容」 (『国語科教育第 65 集』全国大学国語教育学会、pp.35-42.)
- 羽田潤 (2020) 『国語科教育におけるメディア・リテラシー教育の研究—マルチモーダル・

テキストの活用を中心に』、溪水社

藤田弘之(1990)「イギリス保守党と教育黒書運動」(『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学 No.40』 pp.135-149)

松山雅子(1995)「イギリス国語教育におけるメディア解釈—新たなよみの教育の模索」(『学大国文 38号』大阪学芸大学国語国文学研究室、pp.1-15.)

松山雅子(2013)『イギリス初等教育における英語(国語)科教育改革の史的展開—ナショナル・カリキュラム制定への諸状況の素描』、溪水社

Connolly, S. (2013). *Learning Progression in Secondary Digital Video Production*. PhD Thesis. London. Institute of Education.

Connolly, S. (2020). Towards an epistemology of media education: confronting the problems of knowledge presented by social realism. *Pedagogy, Culture & Society*, 1-15.

Connolly, S. (2021). *The Changing Role of Media in the English Curriculum*. Routledge.

Department for Education (2010). *The Importance of Teaching*. DFE.

Department for Education (2014). *National Curriculum in England: English Programmes of Study*. DFE.

## 【注】

- <sup>1</sup> 例えば読解力(literacy)は7位(2000年)から17位(2006年)となったことが言及されている。ちなみに白書が出される前年の2009年については25位であったが、これについては結果が公表される時期との兼ね合いで言及されていないものと考えられる。
- <sup>2</sup> 極東から北欧。主に韓国やフィンランドが言及されている。
- <sup>3</sup> ナショナル・カリキュラム制定への過程においてはかなり多くの意見交換が行われる。2010年頃までの初等の国語科に関するものについては松山雅子(2013)に詳しい。
- <sup>4</sup> 2014年のナショナル・カリキュラム制定への動きについては、日本においても紹介している(国立教育政策研究所, 2013)。
- <sup>5</sup> 三カ所の表現は次のとおり。①生徒たちは、神話、伝説、伝統的な物語、近代文学、伝統文学、他の文化や伝統の本など、さまざまな本に親しむ機会を増やす(5・6歳の学習プログラム)、②読書を通じて、生徒たちは文化的、感情的、知性的、社会的、精神的に成長する機会を得ることができる。特に文学は、そのような発達に重要な役割を果たす。(KS3学習目標)、③生徒たちは次のような方法で文章を理解し、批評的に評価することを教えられなければならない。・・・文章の目的、対象読者、コンテキスト(社会的、歴史的、文化的文脈とその文学的伝統を含む)に関する知識を用いて、評価すること(KS4学習プログラム)。

- <sup>6</sup> BFI (British Film Institute) が出版する映画雑誌。1932年創刊。
- <sup>7</sup> Connolly は「ポピュラーカルチャーやメディア・テキストを扱うには、教育のトレンドに逆らい、時には学習者たちが自分よりも多くのことを知っていることを認める必要がある (p.33)」と自らの主張を明確にしている。
- <sup>8</sup> 「教育黒書運動」については、藤田弘之 (1990) に詳しい。
- <sup>9</sup> Cox の仕事はある程度評価できるものとして記述した例は、日本で紹介されているイギリスのメディア教育関連の文献 (特に国語教育関係の文献) に全くないことを考えるならば、これには重要な示唆が含まれているとも思われる。
- <sup>10</sup> ナショナル・カリキュラムは各学校での自由な実践を阻害するものではなく、むしろさまざまに拡張して実践ができるものであるというある種の楽観的な捉え方が国語科のメディア教育の継続を後押ししてきた側面もある。